

でに冷かに並べられてあつた。この薄暗がりには不気味に立ち並んだ仏像の間が、老人にとつては極楽にも比すべき安心の境地であつた。殊に老人が信仰措かない、或る上人から譲受けた如来の尊像は、真黒な龕の奥深く一穗の燈明の揺めきに尊く尊く拜まれた。その前で老人は一心に木魚を叩いた。

七年の長日月を費して御堂は落成した。その落成の数ヶ月前、老人は、嘗て使つた番頭が或る温泉地に住んでゐるのを頼つて、湯治旁々保養に出掛けた、これが老人の初旅であつた。さうしてその旅先で突然に発病して危篤に陥つてしまつた。急を聞いて老人の後妻が草鞋穿きで山路を越して馳せ付けた時にはもう間に合はなかつた。善八老人の遺骸は其処から船に乗せられて、大雨雷の夜、暗い老人の家に着いた。

葬式は老人の生前に相応した、やはり質素なものだつた。老人の怒りに触れて家を出てゐた喪主は、数年目で棺の中の父に對面したのであつた。

続いて御堂落慶の式典は壮大に新しい主人の手で挙げられた。それから故老人の氣に入つてゐた或る僧が、御堂守として邸内に住むことになつたが、この頃から新しい主を迎へた一家には何となく風波が起ち初めた。

善八老人の遺志で、老人の老妻は御堂守の僧を連れて、西国三十三ヶ所の靈地巡礼に旅立つた。その留守に、実直に老人に仕へた番頭は、若い番頭と出代つてしまつた。老妻が西国の旅から戻つて、老人の遺志通り、持ち帰つた三十三ヶ所の靈地の土を老人の墓に收めると間もなく、老妻は自分の生んだ娘を連

れて他に別居させられて、跡の門口には××合名会社と書いた真鍮の看板が張出された。家中の風波は段々と高まつて来た。然もこの風波の絶えない広い邸内をつゝんで、御堂からは堂守の僧の叩く看経の鉦が、善八老人の御堂建立を嘲笑つた近隣の家の朝夕に、いつも静かに響いて來るのである。

(大正7年・曲水218)

## 昨日の人々

鶏買の「懐手の文次」の親父だつたか、伯父だつたかが死際の話——

病人は、垢にまみれた冷たい蒲団の中で、ごくりと今際の息を引きとつた。

怒つたやうな悲痛の顔を睨み合せたまゝ、黙々と、身動きもしないで暫く枕許に坐つてゐた貧しい母子は、やがてぶつ／＼と咳きはじめた。そして、早桶に入れるには「死人が強ばつてしまはない中に、そろ／＼」その脚を折曲げて置いた方がいゝと、慘ましい相談がまとまると、二人はぼつ／＼蒲団の下に手を挿し入れて、冷たい脚を探りあてた。すると、死人の口から、かぼそい声が辛うじて洩れた。「文次、俺やあ、まだ、死にやあしないんだえ、」

「襟もとから冷水を浴びた」思ひに息を詰めた二人が、やが